学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　苗族櫛と社会関係をめぐる文化人類学的研究
　　―1950 年代以降の中国貴州省黔東南州台江県施洞鎮の事例を中心に

申 請 者 氏 名　　郭　　睿麒

本論文は、中国南西部の貴州省黔東南苗族侗族自治州台江県施洞鎮を主な調査地として、「*Daib Peb*」（ダァプ）と自称する苗族グループの女性たちが所有する櫛はいかなるものかを文化人類学的に考察したものである。

本論文では、櫛の象徴的意義を概観した上で、モノから社会見るという観点から、櫛を介して展開される個人と社会、ヒトとモノとの相互的行為を記述することで、1950 年代以降の中国苗族社会における櫛の象徴的意義を考察し、櫛というモノをめぐる社会関係を明らかにした。

本論文は、序章と第 1～5 章、終章から構成される。

序章では、本論文全体の論点が示される。これまでの物質文化研究の経緯を整理した上で、苗族の頭飾である櫛に関する研究は、櫛が反映する文化の意味や価値を機能論や象徴論といったもの還元的に考察することが多く、櫛の所有者である苗族女性および現地社会に関する民族誌的な記述は欠けていることを指摘した。また、櫛および現地社会に対する民族誌的調査を詳述するに際して、櫛をヒトと対称的な位置にあるモノとして位置付け、櫛とそれをめぐる社会関係に焦点をあてる議論を展開した。

第 1 章では、中国貴州省黔東南州地域の苗族櫛の概要を整理し、施洞鎮一帯の苗族の苗族櫛を詳細に記録した。現地の人々の生活と人生儀礼の事例から、苗族櫛は女性のライフステージを反映するモノであることと、現地の若い苗族女性にとって、櫛が象徴的な頭飾りから化粧バッグに入る可視化されない小道具になったことを指摘した。最後に、「*fangb nangl*」というグループと「*ghab xak khob*」（ガシャンハォ）というモノの分布が完全に一致すると同時に、「*fangb nangl*」内では「*fangb eb*」（ファンエォ）と「*fang bil*」（ファンベェ）のような社会集団内部のサブグループがあることも示した。

第 2 章では、櫛の民族誌的な記録と分析に基づき、施洞鎮一帯の苗族の苗族櫛をめぐる人々の対話を詳細に分析し、「*fangb nangl*」の「*ghab xak khob*」という苗族櫛の象徴的意義とその変容を明らかにした。従来の研究で「変化なし」とされてきた、苗族櫛というモノの象徴的意義（婚姻可能なシンボルなど）は社会環境により変化する一方、物質としての苗族櫛は変化できないという観念が根強く存在し、色や形状を流行にあわせて変更することが許されないため、「*ghab xak khob*」は新たなシンボル（年老いた女性）としての意義が賦与されるようになったことを明らかにした。

以上 2 章の内容を通して、従来の研究では明らかにされていない苗族櫛の象徴的意義およびその変容を明らかにした。しかし、それは観察者である筆者と使用者である苗族女性が櫛に与えた文化的意義と象徴的意義についての再考に過ぎず、先行研究を同じ枠組みで再生産することでしかない。そのため、本論は第 3 章～第 5 章を通して、櫛をヒトと対称的位置にあるモノととしてとらえ、櫛の物質的主体性および櫛と人間の関係を考察した。

第 3 章では、「*ghab xak khob*」の苗族櫛の製作、流通、消費に関する諸現象を追究し、黔東南州の苗族地域における市場と社会の実態を詳述した。改革開放後、市場経

済の発展に伴い、グローバルな生産・流通・消費システムが徐々に中国社会に浸透するようになり、「*ghab xak khob*」などの苗族櫛の製作と流通は既にそれが所属している地域を脱出したことを明らかにした。一方、「*ghab xak khob*」の需要は脱地域的な市場原理に回収されることなく、苗族櫛を挿す苗族グループの範囲内に留まっていることも明示した。「*ghab xak khob*」が「*fangb nangl*」内で製作されなくなったことにより、その欠乏を補填することとなり、「*fangb nangl*」地域を超える社会関係が「*ghab xak khob*」を介して創り出された過程を明らかにした。

第 4 章では、苗族櫛というモノとヒトとの相互関係を考察するために、筆者自らがその製作実践に参与することで、これまでの先行研究で見落とされてきた苗族櫛の製作工程を明らかにした。製作現場において、櫛職人たちによる一連の製作過程を記録・分析し、櫛製作においては、必要とされる技能は反復的な実践を通じて身体的に習得されることを指摘した。また、櫛職人のブリコラージュ的実践により櫛製作の道具と文様が出現したこと、また櫛とその文様が道具を介して、職人と素材との相互的交渉で構築されたことを明らかにした。

第 5 章では、筆者の現地調査の事例と追加調査のデータを通して、苗族社会における櫛と「生理的嫌悪感」との関係性を示した。それを踏まえて、櫛そのモノの物質的主体性に関する研究の可能性を探索した。アクターネットワーク理論に基づいて、モノのエージェンシーは人間に賦与されるものではなく、ヒトとモノとの物理的接触や相互的行為により、構築される感覚と認識であると仮定し、それをアンケート調査の結果から検証した。アンケート調査のデータを分析し、櫛が媒介する生理的嫌悪感のいくつかの特徴は、哺乳類のインセスト回避と部分的に合致することを指摘した。それを踏まえて、モノがヒトとの物理的接触や相互的行為により特定のエージェンシー（インセスト回避の傾向）が生じることを明らかにし、ヒトとモノとの物理的接触、相互的行為の中にモノの物質的主体性を捉えるという研究の可能性を示した。

以上の手続きを経て終章で議論をまとめている。本論では、まず苗族櫛の象徴的意義とその変容を明示した。続いて、モノ研究から櫛の研究意義を示した。本論の研究意義を研究史の中に位置付けるとすれば、20 世紀前半以降の象徴論といった、人間中心的な研究を批判的に検討し、その可能性と限界を事例研究から改めて提示した。そのうえで、モノ研究の視点から、社会がいかに構築され、維持され、変動されるかを解明した。本論で対象となったのは、あくまでも現在の苗族社会の 1 事例に過ぎないが、人類の歴史において長い歴史を有する櫛というモノを対象とし、ヒトとモノという極めてラディカルなテーマを深化させ、新たな可能性を提示したものである。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 144 号	氏　名	郭　睿麒
論文題目	苗族櫛と社会関係をめぐる文化人類学的研究 ――1950年代以降の中国貴州省黔東南州台江県施洞鎮の事例を中心に――		

（論文審査概要）

本論は、中国南西部の貴州省黔東南苗族侗族自治州台江県施洞鎮を主な調査地として、苗族グループの女性たちが日常的に着用・使用する櫛はいかなるものなのかを文化人類学的に考察したものである。本論では、まず櫛と婚姻圏との関係が示され、象徴的なモノとしての櫛の意義が示される。その後、象徴としての櫛の意味の変化、新たな櫛の流通経路と社会関係、櫛職人の身体知とブリコラージュが描かれた後、櫛をヒトと対称的な関係にあるモノとして論じることの可能性が、日中のアンケート調査から示される。本論は櫛そのものに注目するだけではなく、櫛を介して展開される個人と社会、ヒトとモノの様々な相互行為を記述することで、苗族社会における櫛の象徴的・社会的意義、櫛をめぐる社会関係を明らかにするものである。

本論は、以下の順を追って議論が展開される。はじめに序章において文化人類学におけるこれまでの研究の系譜が象徴論とモノ論とを併置しつつ整理・議論される。そのうえで、苗族櫛の研究を位置づけ、改めて苗族櫛の動態的な象徴論の必要性とモノ論からの議論の意義が説かれる。また苗族社会と苗族櫛に関する先行研究が示され、これまでの研究の限界と苗族櫛を調査・研究することの必要性が明示される。以降、各論では苗族社会における具体的な事例を伴って１章から４章へと議論が続く。

第 1 章では、これまでの言語圏や服飾圏では、明確に規定されてこなかった苗族グループの境界が櫛によって描かれる。これによって、先行研究では不明瞭であった苗族内のサブ・エスニシティ、櫛を基にしたエスニック・バウンダリーが明確に提示される。また同時に苗族女性のライフステージと櫛との関係も明らかにされる。第 2 章では、苗族社会における女性のライフスタイルと櫛の関係から、櫛という象徴的な道具がもつ意味と変化が、現地社会における複数の対話事例から描き出される。櫛がもつ象徴性が時代とともに変化し、それを社会劇として論じることで、櫛と社会の動態的関係性が描き出される。第３章では、歴史的な変化から苗族の櫛の生産・流通体制が大きく変容したことが描かれる。エスニックシンボルとしての櫛は、20 世紀後半以降ある工房によって生産されてきたことが明らかにされる。苗族櫛は村落内で生産する状態から、一部の職人集団によって生産されるようになり、苗族櫛を媒介とした新たなネットワークが形成され、また苗族櫛の文様もそれに付随して創り出されるようになることが明らかにされる。続く第 4 章では、著者自身が櫛職人のもとへ「弟子入り」し、フィールドワークを行い得た知見を基に、櫛の紋様は、単に工房の職人が人為的に創り出したものではなく、偶発的に得た道具との関係性で創られることが明らかにされる。これにより苗族櫛がヒトとモノとのブリコラージュ的実践によって製作される過程が描き出されることとなる。

以上が、苗族櫛に特化した調査・研究であるが、こうした櫛研究が決して一つの社会集団だけに限定された議論ではなく、さらなる議論の射程を持つものとして第 5 章が接続される。第 5 章では櫛をめぐる日中のアンケート調査のデータから櫛が生理的嫌悪感を介在させることを指摘する。データでは櫛の共有に関して男性は同性／異性間で大きな偏りを見せないのに対して、女性は異性（とりわけ父）に対して櫛の共有を拒否する傾向が強く表れる。これは苗族社会においても同様にみられる傾向であり、櫛が生理的嫌悪感を媒介するモノであることが示される。これらの議論が終章でまとめられる。すなわち本論は苗族社会における櫛の動態的な象徴性とエージェンシーを有するモノとして側面を描き出すものであり、民族誌としての研究成果を有するとともに、モノとしての櫛研究の意義・重要性が明示される。

以上の内容から、審査委員会は本論を以下の要件を十分に満たし、達成したものと考える。

1．創造性：20 世紀以降の文化人類学的研究の系譜を丁寧に整理した上で、本研究課題の意義を提示し、苗族櫛の研究に対して、オリジナルなデータに基づいて新たな知見を加えている。とりわけエスニック・バウンダリーに関しては、その存在は指摘されていたものの、それがどの範囲を表すかは明示されてこなかったが、本論において複数の婚姻圏との関係が明らかにされた。また苗族櫛の流通、製作に関しては、これまでその重要性にもかかわらずまったく議論されてこなかった部分であり、著者が櫛職人に「弟子入り」して得た情報は非常に重要性が高くまたオリジナリティとしても申し分ない。このことから創造性は十分に満たしていると考える。

2．論理性：本論は先行研究の整理、提示の仕方、論証において適切な手続きがなされており、審査委員会および外部審査委員は議論の展開のあり方に問題がないと判断している。

3．厳格性：先行研究が十分に渉猟されており、オリジナルな一次資料に関しても適切に提示されている。予備審査の際に指摘があった、関連領域に対する先行研究への配慮や、櫛の分布や特徴の提示の仕方に関しても適切な対処がなされている。

4．発展性：本論は苗族社会における、苗族のサブ・エスニックグループにおける櫛を対象としているに過ぎない。しかし、本論は苗族社会における櫛を詳細に調査し、分析することにより、その動態的な象徴性、モノの変化の記録、漢族研究との比較材料、インセストの指標としての櫛の意義など、文化人類学的研究のみならず、多方面に研究の可能性を示すものである。これらは、本審査委員（文化人類学、民俗学、歴史学、考古学、社会心理学）のみならず、外部審査委員（民俗学・物質文化学）においても認められるところである。そのため、本論は議論の発展性という部分に関しても十分に達成していると判断する。

以上より、本研究課題「苗族櫛と社会関係をめぐる文化人類学的研究」は十分に研究の意義と目的を達成しており、博士論文として文化人類学に留まらず学術的意義を有する論文として評価できる。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）小林宏至

（氏 名）田中雅一

（氏 名）馮賓

（氏 名）高橋征仁

（氏 名）谷部真吾